

まの自分を受け止めてくれたりするのである。しかし、変な所で妥協して、「キリスト教？たいした事ないよ」などと切り替えしてしまえば、それまでなのである。そこで気付くのは、人との会話の中に正に自分の信仰が問われているということである。「たいした事ない」と批判されるのは組織のこともかもしれないし、認めなければならぬ間違いがたくさんあるかもしれない。しかし、自分の信仰だけは、居直ったり、自分の狭義の信仰として守りに入ったりしたくないという切なる希望はある。しかし実際は、キチジローになってしまいかもしれない。四旬節において、ペトロの三度の裏切りが身にしてみる。

「二つのことを覚えなさい。一つは、決して自力に頼ってはいけないこと。この世の風評をもとに考えてはいけません。ただただ神様のみわざをまず想い、ついで自分の魂のこと、そして天国に至る道のことを考えなさい」（マルチリオの心得）

これは、わたしをとて謙遜な

気持ちにさせた。私が抱いていた消化不良の信仰は、そもそも私が神から命をいただいたことすら忘れていたかのような傲慢さであった！いたいた命を生きるのには神のためであり、死ぬのも神のみ旨に戻るためのはずではないか。そして、ここに生かされているのは、神からの恵みによるものであり、自力では生きられない。日本の殉教者たちは、信仰の恵みを受け、信仰に生きる恵みも与えられているが、過酷な迫害もその身に受けているのは、本当に神により頼み自力を捨てなければできないことである。この小冊子は、私の態度が「何かあると、決まって人に相談し、その助けを借りて事を解決しようとするのがこの世の習い」と指摘し、「人生の区切り区切りに神に頼る選択を必ずしなければならぬ」と助言する。

つい二、三年前に海外で貧しい生活や荒んだ生活を送っている人々を目の当たりにし、自分もその環境に入ってみた時、あんなに命の尊さ、隣人の尊さを感じ何かなければという思った経験、なのに自分の無力感を思い知らされ

たという経験をしたのに帰国してからその思いから遠ざかっていた。

大きな人生の岐路ばかりでなく、一日の終わりにその日を見直し神を選択し直す「意識の糾明」があるが、どうして毎日の事となると大きな広い目で見えることを見逃してしまうのだろうか。

「あなたには何の恨みもありません。安んじてください。」（ガスバル西玄可）

実は罪に甘んじているうちに人を傷つけ、自分を傷つけ神を傷つけている私に、イエスは正に死んでくださったのだ。小冊子にあるヨハネ南五郎左衛門（P36）は、一度信仰を捨てた若い侍であったが、回心しゆるしを与えられ、結局殉教者の仲間に入ってしまったそうである。「神のゆるし（いつくしみ）に触れたとき、人は新たに創造されます。」と小冊子にある。殉教の教会は、「ゆるしの恵みを激しく求めた教会」だったようである。

小冊子は、「殉教を現代に生きる」ところから始まり、「共同体」

「家庭」「信徒」「女性」「子供」「司祭・修道者」「秘跡を生きる教会」と続く。それは、一般に思われそうな抱えきれないほどの重い過去の回想を無理やり背負うのではなく、今の世にあっての殉教を信仰の目から見させてくれる。そして、それを現実的に、実践的に生きる希望を与えてくれる。

パウロの『わたしたちに心を開いてください・・・あなたがたを責めるつもりで言っているのではありません。・・・あなたがたはわたしたちの心の中にいて、わたしたちと生死を共にしているのです。わたしはあなたがたに厚い信頼を寄せており、あなたがたについて大いに誇っています。わたしは慰めに満たされており、どんな苦難のうちにあっても喜びに満ちあふれています。』に励まされ、また司教様の年頭書簡『ミサを中心とした教会での、神と人との出会いの喜びを体験する』恵みを日々請いながら、殉教者の方々の死から益々学びたい。

